



心を寄せる（6）



今も、テレビや新聞でウクライナやガザ地区での戦闘の様子が伝えられ、毎日のように、子どもが怪我をして泣いている様子が映し出されます。被害を受けている人にしか分からない苦しみや痛みがあるでしょうが、見ている私たちも本当に心が痛みます。

「国連UNHCR」（国連難民高等弁務官事務所）の広報誌に次のようなメッセージが記載されていました。

「家を焼かれ、夫を失って。それでも、私たちは生きていく」

2023年5月、スーダンの私たちの家に武装した男たちがやってきて、銃で夫と義理の兄弟たちを撃ちました。夫はお腹を撃たれて亡くなり、数日後に5人の兄弟も死にました。そして、私たちの家も近所の家もみな焼き払われたのです。私は子どもたち2人とどこへ行けば良いか分からないまま、隠れながらさ迷い歩きました。

戦闘が激しくなる中、親戚が私と子どもがチャドへ避難する車の料金を工面してくれました。食べ物も水もほとんどない、苦しい旅でした。旅の途中で、武装した男が車を止め、私だけが降ろされました。「金を払わなければ殺す」と言うのです。渡せるものは何もなく、子どもたちは泣いていました。その時、運転手が間に入って、お金を払ってくれました。私は彼のおかげで命が助かったのです。

チャド国境に着いた時、私たちは何日も食べていませんでした。当初は夫が殺された時の悪夢を見たり、絶えず涙がこぼれたり、気が狂いそうな思いでした。国境は過密状態でしたが、数週間後に難民キャンプに移ることができました。支援には本当に感謝しています。シェルターもなく、寝るマットやトイレもなかったのですから。家や毛布、蚊帳も受け取り快適になりました。今後は働いて、他の人に頼らずに生活したい。子どもたちには教育を受けてほしいと願っています。

「私たちは苦しんでいます」

6人の子どもを連れ、チャドから30キロ歩いて中央アフリカ共和国へ避難してきたヘレナさんはこう語ります。

「私たちは苦しんでいます。昨日はテントに雨が落ちて眠れませんでした。飲み水や食べ物、ベッド、健康に必要な物がある家を夢見ています。子どもたちには学校に通わせたいです。私とは違い、まだ間に合います。もしできることなら、今すぐここを出たいです。私たちはここでは暮らせません」

日本に住むほとんどの人は、寝る家があり、お腹が空けば食べる物もあります。学校へ行けば、教育も受けることができます。また、病気になったり、怪我をしたりすれば医者に診てもらい、治療をしてもらうことができます。でも、難民の人たちやウクライナやガザのような戦闘の中で生きている人たちは、それがかなわない人たちが多くいるのです。

日本で生きる私たちは、どのように生きていけばいいのでしょうか、家族で考えてみませんか。